

【佳作】

## 『迷い子』

「あらまあ、どうでしょう」

頬に手を当てて、私は途方に暮れました。足元では真つ白な猫がなあんと鳴きながら長いしっぽを揺らしています。昔飼っていたユキちゃんにそっくりで、つい後を追っていたら、すっかり見覚えのない場所に来てしまったようです。

「猫ちゃん、あなた、ここがどこかわかる？」

猫ちゃんは春の空のようなつぶらな目を私に向け、もう一度なあんと鳴きました。

「困ったわねえ」

家の周りではあまり見ないような建物がたくさん建っていて、もしかして思っているよりずっと遠くに来てしまったのかしらと不安になりました。

木枯らしに合わせて、もも肉の入った袋がかさかさと言っています。桜子が学校から帰ってくる前に夕食の支度をしてしまいたいのに、これでは間に合うか分かりません。

斜陽の合間を縫うように、カラスが群れになって飛んでいます。遠くからは遊びから帰るのでしょうか、幼い子供たちのしゃいだ声が聞こえ

ます。足元に居たはずの白い猫も、いつの間にか居なくなっていました。

「こんにちは、こんな所でどうしたんですか？」

突然声をかけられてハッと振り向くと、そこには細身の男性が立っていました。草臥れた青いワイシャツと、黒いズボンを履いた、メガネの男性です。四十歳くらいでしょうか。もさもさした髪が、まるで鳥の巣のようです。

「ええつと……」

私は口ごもりました。猫を追いかけて迷子になったと言ったら、はしたないと思われるのではないかと思っただけです。

「道に迷って、帰り方が分からなくなってしまったんです」

結局、猫の話はしませんでした。家の近くで迷うなんて、変な人だと思われるかもしれないわ。そんな私の予想に反して、男性はそうなんですわ、と頷いただけでした。

「それはさぞかし不安だったでしょう。家までお連れしますよ」

「まあ、私の家分かるんです？」

驚きのあまり、少しだけ大きな声が出てしま

国際日本学部 国際文化交流学科4年 今井颯希

ました。恥ずかしさ半分、不信感半分で男性を見上げます。私はこの人を知りません。なのにどうして、この人は私の家分かるのでしょうか。「もちろんですよ。義夫さんとはよくお会いしますから」

目の前の青年から主人の名前が出てきたものですから、もっと驚いてしまいました。町内会繋がりなのでしょうか。

「それ、重たいでしょう。持ちますよ」

男性はそう言うと、私がついていた袋をひよいと持ち上げてしまいました。

「たくさん買ったんですねえ」

「ええ。娘がね、から揚げが大好きなんです。だから作ってあげようと思って」

「それはいいですねえ。きつと喜びますよ」

長い影が地面に延びています。ゆっくりと歩いてくれるその横顔に、何故でしょうか、背格好も容貌も異なるのに、今は亡き父の姿を思い出しました。

「ふふふ」

「どうしました？」

「父のことを思い出したんです。頑固で融通の利

かないところも多くつて。でも、歩く時はいつも足の遅い私に合わせてくれたんですよ。あなたがゆっくり歩いてくれるのを見て、きつと重なったんだわ」

「素敵なお父様ですね」

「ええ、そうなの。きつとね」

まだ幼い私の手を引いて歩いてくれた人。最後に会ったのは、まだ私が五つにも満たない頃だったはず。遠いところに行つて、そのまま帰つてこれなくなつてしまつたから、三つ下の妹は父の顔を覚えていません。おつかない人ではありましたが、叶うならもつと一緒に居たかつたと、今になつても思います。もしいてくれたら、母もどれほど楽だつたことでしょうか。

「ああ、よかつた」

不意に男性は遠くを見つめてそんなことを言いました。見れば、すっかり白髪交じりのおじいさんが、こちらに向かつて歩いてきています。

「田中君、いつもありがとうねえ」

男性は目元の皺を深めて、柔らかい声でそう言いました。

「いえいえ、見つけられてよかつたです。入れ違ひになつたらどうしようかと不安で」

「今はすごく便利でねえ、どこにいるかすぐにわかるようにしてもらつたんだ」

「ああ、なるほど、スマホですか。それでここがわかつたんですね」

二人は二人にしか分からないことを話しているようで、私にはちんぷんかんぷんです。だから私

は黙つて二人の会話を聞いていることにしました。

「田中君と一緒にいてくれて本当に良かったよ。美代子も安心できただろう」

「あら、私の名前を知っているんです？」

「ああ、もちろんだとも。よく知っているよ」

おじいさんはまた目尻の皺をくしゃつとさせて穏やかに笑っています。とてもステキで、安心感のある笑みです。どうして私の名前を知っているのでしょうか。つい田中君と呼ばれた人の方に視線を向けてしまいました。その人は困つたような顔をしているだけです。

「桜子が心配していたよ。お前さんがいなくなつたと云つてね」

「あら、もう帰つてきていたの？ 大変、早くお夕飯の支度をしないと」

「大丈夫だよ。もう桜子がやってくれているから。あの子が料理上手なのはお前さんも知ってるだろう？」

「ええ、でも私、あの子から揚げを作つてあげたいの。だから早く帰らないと」

「そうかそうか、それは早く帰らないといけないなあ」

おじいさんはそう言いながら、田中さんからも肉の入つたレジ袋を受け取りました。どうやら今度はこの人が家に送つてくれるようです。

「今度お礼に行くよ」

「いえいえ、気にしないでください。たまたま通りかかつただけですから」

田中さんにはこりと笑つて、それからすたすたと歩いて行つてしまいました。私と歩いていた時よりもずつと速いものですから、やはりあの人は優しい人なのでしょう。

「俺たちも帰ろうか」

おじいさんは言いました。私は黙つて頷きました。

おじいさんは迷いのない足取りで歩いていきます。どうやらこの人はゆつくり歩くということができないようで、少し先へ行つては止まつて私を待つということを何度も繰り返しています。それが義夫さんにそっくりで、なんだかおもしろくなつてしまいました。

すつかり日は沈み、鮮明だつた夕焼け空は、淡い青に占領されています。きつとそのうち星が夜空を彩るようになるでしょう。

それから少し歩いて、ようやく見知つた場所に出ることができました。広い公園の入り口を前にして、ふつと昔の記憶が蘇つてきます。

「昔よく、お花見の時期にここに来たわ。お祭りの時期になると屋台がいっぱい並ぶから……」

そう言つて隣を見て、あつと思ひました。どうして今まで忘れていたのでしょうか。

「そう、貴方がいつつも連れて行つてくれたんだわ。お祭りが大好きだから」

いつの間にかここのお祭りもなくなつちやつたわね。私がそう言つと、おじいさん——いえ、義夫さんは目尻の皺をぎゅつと寄せて、そうだなあ

と相槌を打つた。

「昔はたくさん人がいたからなあ」

過去を偲ぶように、義夫さんはしみじみと呟きました。その視線は少し遠くを向いていて、もしかしたら私と同じ風景を思い浮かべているのかもしれない。

ようやく家に着いたとき、迎いはすっかり暗くなっていました。義夫さんが扉を開けると、中から肉の焼けるよい香りが漂ってきました。

「ただいま戻りました」

義夫さんがそう言うと、部屋の奥からバタバタと足音が聞こえ、若い女の子が出てきました。その子は私たちを見てほっと息を吐き、それから義夫さんが持っている袋を見て眉を顰めました。

「ええ、また買ってきちゃったの？ まだたくさん余ってるのに」

「いいじゃないか。桜子の唐揚げ、お前も好きだろう？」

「確かにお母さんの唐揚げは美味しいよ？ 美味しいけどさあ、限度ってものがあるじゃん。もう冷凍庫パンパンなんだけど」

「これくらいみんな食べればあつという間だろう」

「ダイエツト中なのに……」

「詩羽は痩せすぎなんだから、もっと太ったっていいくらいだよ」

「やだよ。可愛い服着れなくなっちゃうじゃん」

詩羽と呼ばれた少女は義夫さんからも肉を受け取って、部屋の奥に引っ込んでしまいました。リレーのバトンのように受け渡されたレジ袋は、

心なしか草臥れているようでした。

「今の子はどなた？」

「お前さんの孫だよ」

義夫さんは珍しくそんな冗談を言いました。

実際は桜子のお友達でしょう。同じくらいの年の子に見えましたから。

コメント

高校生の時に認知症について学ぶ機会がありました。これはその時に浮かんだアイデアを元にして話を膨らませたものです。

人に寄り添うには、何が一番大切でしょうか。人によって考えは異なると思いますが、私は相手のことを理解することだと考えています。本人との対話を通じて知ることとあれば、人から聞いた話や、いつか聞き齧った知識から推測することもあるでしょう。そうやって相手を知ることこそが、思いやりの心を持ち、相手に寄り添うために大切なことだと思っています。

小説は、書き方によっては一番登場人物の内面を知ることが出来る媒体だと考えています。もちろん映画やドラマでも、言動や表情からある程度推測することは出来ます。しかし心情を理解するという点では、やはり情報量が一番多い小説が優れているのではないのでしょうか。

今回は資料を集める時間も執筆の時間もあまり取れなかったのが無念でなりません。いつかもっと入念に準備をしてリベンジしたいです。